

# カント (1724<sup>1804</sup>) 哲学の研究をふり返って

細 谷 章 夫

この「人文」が、私の退職記念号ということでしたので、早くからカントに関する論文を書きあげたいと思っていました。しかし実際には退職にともなう雑事に追われ、論文を仕上げることができませんでした。そこで1978年4月の本学就任以前から、カント研究を続けてきましたので、現在私がカント哲学に関して、どのような考え方をもっているのかを、ごく簡単に述べることにしました。専門家向けの話ではありませんから、大雑把な話になります。また他の科学論に対する私の認識も、私が勉強したときと、変化しているかもしれません。その点、正確とはまいません。どうぞ、ご了解下さい。

カント哲学の全体を考えますと、私はミュンヘンのアルテ・ピナコテークにある、アルトドルファーの絵を思い浮かべます。それは「アレクサンドロスの戦い」と題するもので、イッソスの戦い(333BC)の一場面を描いたものです。大王がペルシャ王ダレイオス3世を打ちまかせようとする絵で、そこには何千という両方の兵士が対峙しています。槍をかまえて追撃しようとする大王、恐れおののくダレイオスの戦車が、すでに方向をかえています。その克明な描写、それでいて絵全体からせまってくる迫力、それはカント哲学にもいえることです。カント哲学の一つの特色はその思想の徹底性にあります。これでもか、これでもかとトコトン考えぬく思考の強靱さ、それは偉大な哲学者のもつ特性なのかもしれません。しかも、それを少しもごまかすことなく、誠実に遂行するところに、カントの卓越さがあるように思います。なにぶん、今まで考えられたことのないところへ踏み込んだの思考ですから、どうしても新しい言葉を必要とします。新しい言葉を使わないでは、新しい思想を解明することはできません。そこでカントは新しい言葉を導入して、思想を説明しようとしています。これが私たちには逆に、カント哲学をむずかしいと感じさせる理由です。しかしカントは決して不必要にそれらの言葉を導入したのではなく、どうしても必要だから導入したのです。しかしカントにも当然、思想の変化、あるいは説明の仕方の変化があります。あとで考えると、こう説明したほうがいい、と考えたのでしょう。それが例えば主著の「純粹理性批判」の第一版と第二版の相違となって表われてくるのです。ですから私たちはその両方を読み、その相違を相違として、カントの考えを読みとろうとしなくてはなりません。しかもあるところ(演繹論)では、カント自身それを叙述の仕方の相違であって、思想内容に変化はないといっているのです。ですからよけいに両者を相互に補足しあうものとして読まなくてはならないでしょう。私はカントという人が嘘をついたり、ごまかしたりするタイプの人とは思っていないので、素直にカントの言葉を信じ、解釈しています。しかし学者の中にはそう受けとらない人も少なくないのです。その演繹論のところはカ

ント哲学でもひどく難解なところ。長い間かかって、私が研究した結果はこうです。カントのいうように、それは説明方式の違いで、その思想内容に変化はないということです。少くともそのように十分に解釈できるのです。しかし厳密にいきますと、第一版で新しい概念を入れて、詳しくことこまかに説明されていたものが、第二版では全く消えてしまっているところもあります。これは一体どう考えたらいいのだということになります。これは第二版では、第一版のように説明しなくても、他の仕方で十分説明されていると解されるのです。このような場合、カントの哲学上の問題意識の観点からみなくてはいけないと私は思うのです。カントには哲学上の種々の問題意識があつて、その問題意識そのものは変らないのですが、力点のおき方に変化があることは確かなのです。そんなことがカント哲学の理解をむずかしくさせている、も一つの理由でもあります。

またカントが哲学者として偉大であるのは、哲学上の諸問題を多く意識していて、それらを統一的に説明しようと努力していることです。ですからカント哲学を理解するためにはカントと同じか、それ以上に哲学的な問題意識をもたないと、全く理解不可能ということになってしまいます。これが通常の人がカント哲学をむずかしいと感じさせていることでもあります。一般の人々にとって哲学の問題は人間の生き方といった身近な問題として受けとられています。しかし哲学の問題には知識論（認識論）といった、一般の人々にはどうでもいい哲学上の問題があります。それがなぜ重要なのか、哲学的問題の意識をもたないかぎり理解不可能です。つまり日常生活を営むうえでは知っても知らなくてもいい問題ですから、逆にそのような問題を問題としてうんうんうなつて考えている人間は馬鹿に見えるでしょう。これはまた哲学一般に関していえることなのですが、哲学をむずかしくさせていることは次のことにもあります。人間の生き方といった身近な重要な問題に対して、哲学者の間に統一的な見解がないということです。ただ、生き方に対していろいろな学説があるとしかいいようがないのです。それは問題それ自体のむずかしさに原因があると思われまふ。統一的見解がないということは、問題自体が複雑で、そう簡単に答えられないからだと思ひます。しかし一般の人が求めるものは、たとえば、よりよい生き方を簡単に示したもの、つまりマニュアルが欲しいのです。その点、宗教はマニュアルを示しています。そしてあの世や、天国や地獄、あるいは神を想定します。宗教の多くはなにかそういった証明や説明のできないものを最初から前提し、それを出発点としてある世界観を示します。その点、哲学は基本的には証明されていないものを最初から想定しないのです。哲学は学問であることを目指していますから、その存在が疑問視されているものを、前提することは基本的にできないのです。とはいえ、哲学が人間の生き方を問題とするかぎり、神などの問題に言及しないわけにいかない場合があります。中世のトマス・アクィナス（1225/26～1274）はカトリックの基本的な考え方を確立した人で、普通は偉大な神学者として有名です。しかし私は偉大な哲学者だと思ひています。その理由は次の点にあります。おそらくトマス個人は神の存在を疑ったことのない人だと思ひます。しかしトマスの偉大な仕事

の一つは神が存在するというを、証明しようとしたことにあります。これは明かに哲学の仕事になるからです。

さてここで、カントの哲学上の意図についてお話しします。偉大な哲学者は古来から少数の原理で、世界のすべての事柄を説明しようとの要求を強くもっています。現在のこの複雑な世界を少数の原理で説明しようなどとは不可能だ、無謀だとの考え方ももちろんあります。一般に科学者はその立場をとり、分野を限定し、その分野の中で事象（対象）の性質を追求し、解明する仕方をとっています。経済学が専門だとか、生物学が専門だとかはそのことを意味しています。しかし同じ科学者でも物理学者は、やや哲学に近いのです。物理学者は物質の究極存在を追求しています。すなわちもっとも究極的な物質は何か、あるいはこの物質世界を支配している根本的な原理は何か、などです。現在はご存知のとおり、物理学は原子から、さらに原子を構成する素粒子のレベルに到達しています。そして根本的な原理に関しては、ニュートン力学から相対性理論や量子論に到っています。しかしそれでも哲学者からみますと、物理学者の研究対象はあくまでも物質世界の究極存在に問題が限られているのです。哲学はそうではありません。物質界を含め、人間の精神界までも含めた世界を研究の対象領域と考えています。なおかつそれらに共通の原理・原則を考えていこうとするのです。そして傾向としましては、もはや究極の物質や究極の法則などの説明だけでは精神界は説明しきれませんので、どうしても観念の世界という目に見えぬ、やっかいな問題に向うことになります。カントもその一人で、少数の原理で、この物質界・精神界を含めた世界を説明しようとした。この物質界・精神界を含めた世界を少数の原理で説明しようという学問を、ここでは「形而上学」と名づけておきます。

カントが目ざしたのは、まさに形而上学を学問として打ち立てることでした。そして結論を申し上げますと、カントは知識の問題、道徳・倫理の原則の問題、そして美の本質の問題に関して統一的に、ある程度説明することに成功した哲学者であるといえます。そのためにカントはある特色ある理論を考えました。それはア・プリオリ（先天的）ということですが、それはのちに説明いたします。さらにカントは新しい形而上学を打ち立てようとして、他の哲学者とは違ったアイデアから出発しました。しかもそれを非常に徹底したやり方で開始しました。このカントの仕事は哲学上の種々の問題に深くかかわっていますので、のちの哲学者がなにかするときには、どうしてもカント哲学に言及しないわけにいかないほど、強く影響を与えました。ひどい場合には、カントの哲学を全く理解しない人までも、カントの哲学を口にするほどになったのです。ではその徹底したやり方とは何でしょうか。

カントはそれまでの形而上学を徹底的に批判しました。従来の形而上学はある世界観を示しはするが、その根拠に科学性がないというものでした。もちろんカント以前にも、そのような考え方をもっていた哲学者はいました。デカルト（1596～1650）はその一人ですし、も一人はフランシス・ベーコン（1561～1626）が挙げられます。デカルトはすべてのものを疑い、疑い

えぬものとして「我思う、ゆえに我あり」の思想に到着しました。そしてこの疑えぬ命題から、かれの世界観が展開されるのです。しかしカントはのちにこの命題をも誤りだとするのです。ここで詳しく述べることはできませんが、結論を申しますと、統覚というア・プリオリな原理を導入しないかぎり、「私」そのものは存立しえない。「思う」という主観の働きから直接「私」はでてこないこと、自我の本質を分析した結果をふまえて、デカルトを批判するのです。この問題はこれだけにします。カントの新しい徹底したやり方とはおよそ次のようなものです。カントが当時、学問として確実と思われていたもの、すなわち数学、幾何学、そして物理学の本質を見きわめようとしたことです。カントにとってこれらの学問は、学問として1つのしっかりした基礎の上に築かれていると思っていたからです。つまりこれらの知識が知識として真であるとさせているものは何か、あるいはこれらの学問のもつ客観性とは何か。もっと簡単にいえば、これらの知識を真たらしめている客観性の条件とは何かを追求しようとしたことです。これは哲学上、認識論（知識論）の問題ということになります。そしてカントのねらいはその認識論でえた結果をもとに、客観性のある形而上学を打ち立てるとというのが目的でした。それではカントは統一ある形而上学をうちたてることができたでしょうか。認識論の問題があまりにも大きすぎ、カントの達しえたのは前にも述べましたように認識論、倫理学、美学になんとか統一的な見解を述べるにとどまったとしかいえないと思います。しかし私どものような人間からみますと、それだけでも大変な功績といわなくてはならないのです。カントは認識問題を考えるときに、いつもその先駆者であるロック（1632～1704）や、ヒューム（1711～1776）に尊敬の念をもっていました。しかし他方、ロックやヒュームの経験論を厳しく批判しました。その理由は私たちの知識は経験だけでは説明できない、ということにあります。確かに私たちの知識は経験から出てくることに間違いのないのです。しかしカントによると、すべて経験からというわけにはいかないというのです。経験を分析していくと、そこにア・プリオリな条件が入り込んでいること、逆にこのア・プリオリなものを前提して、経験そのものが成り立っている、というのがカントの主張なのです。ですから、知識のうちに含まれているア・プリオリなものとは、けして経験からは得られないもので、しかもそれなしには経験そのものが成立しないとの意味で、経験を成立させる、あるいは経験を可能ならしめる条件であるとかえいうのです。それはある意味で、私たち人間がひき込んだもので、対象の認識からはけして得られることのできない部分である、というのです。それではそのア・プリオリとカントが見なしたものは何でしょう。より具体的に見ていきましょう。

カントがア・プリオリとするものは種々あると解釈できます。先に述べた統覚はその一例です。それは思考の根本にかかわるものですから、どうもカントのいうことが正しく、ア・プリオリとしかいえぬものなのではないかと、私は思っています。しかしカントは直観の形式として、空間と時間をもア・プリオリなものと考えました。これは非ユークリッド幾何学の出現によって、その主張は変更がせまられるのではないかと私は思っております。このことに関し

ではのちほど、とりあげたいと思います。

もう一種類のア・プリオリなものとはカテゴリーです。カテゴリーとはものごとを考えていくうえで使用する、考えの枠組みといったもの、といえます。カテゴリーという考え方そのものはすでに、古代ギリシャの思想家のなかにあります。それを整理したのがアリストテレス（384～322 B C）です。カントはさらに整理して12のカテゴリーを考えました。そのうちの一つに因果法則があります。つまり原因と結果を結びつけて考えることです。この因果法則を1つの例として、これからカントのア・プリオリの意味を説明したいと思います。しかしこれから述べることは、カントがそのように述べているわけではありません。あくまで私の解釈です。

私が今、川下<sup>かわしも</sup>にいるとします。川が昨日に比べて増水しているのを見て、私はこう推理します。川上<sup>かわかみ</sup>のどこかで雨が降ったに違いないと。これは川下の増水から川上の降水を推測したわけですが、時間的経過の視点から見ますと、逆になります。つまり川上で雨が降り（原因）、そのあとで私のいる川下で増水した（結果）ことになります。私が上記のように推測したのは、おそらく経験がそう推測させたということになるでしょう。またこの推測そのものが正しいかどうかは今は問題ではありません。川下の増水は川上の放水によって生じたのかもしれませんが、あるいは地震によるダムの決壊によるのかもしれませんが。ここで問題なのはある原因があって、必ずその結果があるということなのです。カントのいいたいことはまさにそのことなのです。ある原因があれば必ずその結果があるということを、けして経験は教えない。つまり経験は100%そのことを保障するものではない。経験が教えるのはせいぜい今まではそうであったというだけである。それを原因と結果の結びつきを必然的なものとさせているのが、まさにア・プリオリなものなのです。このことをより説得的なものにするために、も1つの例を挙げましょう。火事があって、家が軒焼け落ちたとします。警察は原因を追求します。煙草の火の不始末とか、ガスのつけっぱなしとか、漏電とか、あるいは放火もあげられるかもしれません。もちろん原因不明ということもあります。しかし原因不明とは火事の原因を特定できなかったということであって、火事の原因がなかったということではありません。カントはここを指摘するのです。ある原因があったら、必ずその結果が存在するとさせているものは何か。ひょっとしたら経験には原因のない結果が生じうるかもしれません。原因と結果の必然的な結びつきをさせているのは、自然といった客観の側にあるのではなくて、人間の悟性が付与したものではないか、そしてまた人間が経験にそのようなア・プリオリなものを付与することによって、私たちの知識は成り立ち、学問は成立するのではないか、と考えるのです。

これに対して経験論者は次のようにいうかもしれません。今までの経験では原因があればその結果が生じた。だから確かに100%の原因と結果の結びつきは保障されないとしても、この原因・結果の結びつきを法則として、あるいは1つの指導原理として、ものごとを考えていくうえで使用することは、なんらおかしいことではない、と。しかしカントからいわせれば、因果法則をすでに法則として、1つの指導原理としてでもあれ、あたかも必然的法則であるかの

ように使うこと自体、まさに知識のうちにはア・プリオリなものを認めたことになるのではない。ましてそのことによって私たちの知識が形成されたとするならば、まさに、そのことこそ問題なのだ、というでしょう。つまりもうそこには経験だけでは保障されない、私たちの悟性の働きといったものが前提されているというのです。いいかえれば、因果法則は、自然界の客観法則とする経験を越えて、100%必然性をもったア・プリオリな原理とし、人間の悟性の働きが引き込まれていると考えるのです。以上がカントのア・プリオリの意味です。これを一般的にいえば、私たちの知識のうちには種々のア・プリオリな原理が入り込んでいるということです。それによって経験が成り立ち、知識が成立し、学問が形成される。しかも学問のうちでも、まさにア・プリオリな学問が存在する、それが数学であり、幾何学である。物理学（ニュートン力学）も部分的にア・プリオリな原理から成立しているとカントは見ます。だからロックやヒュームの経験論者に対して、彼らの理論からはア・プリオリな原理に基づく数学や幾何学、そして物理学は説明されえないではないかといって、批判するのです。しかしカントのいうア・プリオリ性がすべて正しいかという、後の学問の発達によって、必ずしも今はそういえないのです。カントはとりわけ幾何学の基本命題の正当性を、直観形式である空間のア・プリオリ性によって説明しようとした。しかしこれはロバチェフスキーによる非ユークリッド幾何学の出現以降、そのようにいえなくなってきたのです。現在の立場からいいますと、幾何学や数学の基本命題はたんなる前提であって、その基本的な諸命題から、これこれの諸命題が引き出される1つの演繹体系であること、その基本命題それぞれが正当性をもつかどうかは全く問題にならないと考えるのです。以下そのことに関して述べたいと思います。

エウクレイデス（300B. C頃活躍）の「ストイケイア」（原理）は聖書の次に広く読まれた本といわれています。それは学問の1つの手本でした。これが俗にユークリッド幾何学といわれるものです。この「原論」の構成は定義、公準、公理、定理から成り立っています。もちろん定理は公理から証明されます。定義とは「点とは部分のないものである」、「線とは幅のない長さである」のように、その他「面」「直線」「平面」「立体」など基本的な図形の説明です。公準はその基本的な図形の間を述べたものです。問題は第5公準と呼ばれているものです。この第5公準とは「一直線  $c$  が二直線  $a$ 、 $b$  に交わり、同じ内角  $\alpha$ 、 $\beta$  の和  $\alpha + \beta$  を二直角より小さくするならば、この二直線  $a$ 、 $b$  は限りなく延長されると、二直線より小さい角のある側で交わる」です。この命題そのものは図を描いて下さればすぐわかります。しかしそれは他の基本命題に比べますと、やや長つたらしいのです。その意味するところはモダンに表現すれば、次のようになります。「与えられた線分  $a$  に対して、その  $a$  上にない  $b$  点を通して、線分  $a$  に交わることのない線がただ一本存在する」これが普通、「平行線公理」と呼ばれるものです。従来、この公準はわざわざあげられないでも、他の諸公理のうちに含まれているのではないかと、との議論が長い間、数学者の間であったといえます。とにかくロバチェフスキー<sup>(1)</sup>（1793～1856）が現われて、実に面白いことをやりました。他の諸公理は保存したまま、この

平行線公理のかわりに「平行線が二本存在する」との命題を入れました。二本存在するとはその間に無限に線を入れることができますから、「平行線は無限に存在する」と同じことです。もしある数学者たちが主張するように、平行線公理が他の諸公理のうちに含まれているとしたならば、ロバチェフスキーは平行線公理を否定する命題を入れたわけですから、当然矛盾が出てくるはずで、ところがそういった意味での矛盾が出てこなかったのです。つまり次のことが証明されました。平行線公理は他の諸公理のうちに含まれていなかったのです。平行線公理の独自性が証明されたわけですから。さらにのちにリーマン（1826～1866）は平行線公理の代わりに「ただ1本の平行線も存在しない」との公理を入れました。これがリーマン幾何学です。平面に関していいますと、球体の表面をイメージしてくればいいのです。直線はふつう、「まっすぐ」と「最短距離」の意味があります。リーマンの平面では、「最短距離」との意味での直線は曲線となります。それは切断すれば球の中心点を通るような球面上の曲線となります。すなわち大円の弧となります。ユークリッド平面では三角形の内角の和は $180^\circ$ ですが、球面上の3点を結ぶ三角形は $180^\circ$ より大きくなります。これもロバチェフスキーの幾何学と同様に、ユークリッドと違った諸命題が出てきますが、それ自体全く矛盾のない公理体系なのです。リーマンはさらに曲率の概念を導入しました。そして曲率0のとき、それはユークリッド幾何学となることを示したのです。このロバチェフスキーおよびリーマンの非ユークリッド幾何学の出現は、幾何学の公理体系の本質に関して、新しい考え方をひき起こすこととなります。なぜなら、ユークリッド幾何学が正しいのと同じぐらいに、ロバチェフスキーの幾何学も、リーマンの幾何学も正しいというのですから。いやユークリッド幾何学体系がより現実的なのだ、などといえないのです。実際、地球上を大きく運行する船舶は、最短距離として海上に障害がないかぎり、大円の弧を選ぶからです。それは明かにユークリッド的な意味での直線ではありません。さらにのちにアインシュタイン（1879～1955）の相対性理論は非ユークリッド幾何学によって説明されるのです。物理学者は地球上、あるいは太陽系などの狭い範囲でなら、ユークリッド幾何学で考えることは自然だが、銀河系宇宙、さらに遙かとおおい空間を考えるときには、非ユークリッド幾何学的に考えなければ説明がつかないというのです。しかし実際、非ユークリッド幾何学の価値が認められるようになったのは1916年アインシュタインの一般相対性原理が出てからだといわれています。そしてそのような領域では非ユークリッドのほうが自然的だということです。ここで再び非ユークリッド幾何学がまだ一般化していない、カントの時代に逆戻りします。

すでに述べましたように、カントはユークリッド幾何学体系を学問として確立されたものと考えました。しかしカントは哲学者として、それではこの幾何学の正当性の根拠は何かを追求しないではいられません。もちろん幾何学者は哲学者にそのような説明をしてもらいたいと思いませんし、幾何学者自身、ユークリッド幾何学の正当性を信じて疑っていませんでした。なぜならユークリッド幾何学の基本命題である公理そのものは例えば「二点間の最短

距離は直線である」のように、自明と思われる命題から出発しているからです。それらの体系全体が真理であることに疑問をいだかなかったからです。しかしカントは基本的命題が自明であるとは何か、それを追求しました。カントの理論を簡単にいいますと、次のようになります。知識のもとになる経験とはまず見ること、そして考えることにより成立します。見ることは直観の働きであり、考えることは悟性の働きです。すでに考えることにおいて、カテゴリーという悟性の働きがあること、それをカントがア・プリオリなものにしたことはすでにお話ししました。カントは見ることにおける直観にもア・プリオリなものがあると主張するのです。それは空間と呼ばれる直観形式で、それは私たちが対象をとらえる一般的な仕方であると考えられるのです。したがって、ア・プリオリという観点からいいますと、経験が成立するためには、空間というア・プリオリな直観形式を通して、まず対象が与えられ、その諸対象をより一般的に考えることにより、経験が成立し、知識が形成されるという、二重構造になっています。ところでこのア・プリオリな直観形式のとらえ方が、幾何学の諸公理を真たらしめている根拠だとカントは主張するのです。いいかえれば、「二点間の最短距離は直線である」との命題を真とさせているのは、ア・プリオリな直観形式である「空間」の性質に由来するとみるわけです。

しかしカントのこの説に反対する哲学者たちが出てきました。彼らは非ユークリッド幾何学を知っていますし、相対性理論が非ユークリッド幾何学を利用していることを学んでいる人たちです。その中の一人がライヘンバッハ（1891～1953）です。彼はカントのこの理論がおかしいというのです。カントは平行線公理には直接、言及していませんが、ユークリッド幾何学の正当性を主張したことは間違いありません。ライヘンバッハのいい分はこうです。彼の正確な表現は忘れてしまいましたが、その主旨は次のようなものです。もし目の前に二本の平行線があつて、それが実は1kmさきで交っていたらどうか。もちろんこれは厳密な意味で、平行線とはいえません。その二本の直線がそのように1kmさきで交わるような二本の線を目の前にして、直観はそれを平行線でないということを決定する、きめ手をもたない、というのです。これはふえんすれば、カントの言及している直線についてもいえます。1kmさきで1cmのずれを生じさせる直線を目の前にしたら、もうそれは曲線なのですが、直観はこれは完全にユークリッド的な意味で、直線だというでしょう。このライヘンバッハの主張は説得力があります。カントはこの点で理論的に無理があるように思います。しかしこのことはカントのこの理論がすべて誤りといえるかということ、そうはいかないと思います。カントが空間をア・プリオリなものともみなしましたが、それを私たち人間が対象一般をとらえる、一般的な仕方であるとしたことに関してです。それはカント解釈の問題にも関係しますが、ひょっとすると、正しい見方かもしれないのです。通常、人は自然界を見たままに存在すると考えます。ですから空間はカントのこのような人間の主観性に依存した直観形式ではなくて、存在の形式だと考えています。しかし犬が色盲だということはすでに知られており、犬は人間が見るように自然を見ていないことは確かなのです。小さな動物の動きを、高い上空から察知する鷹は、人間とは全く異なる空間



概念をもっているでしょう。視覚をもたない触覚だけの小動物は……とあれこれ考えますと、カントの主張する空間は人間の主観性としての直観形式であるとの見解を、完全にすてきることができないと思うのです。かえって、幾何学の本質は直観に依存しない概念の領域の産物であって、幾何学の基本命題が直観に依存するとするカントの考え方は誤りである。ただし、人間の認識の仕方としては、空間を人間の主観性にもとづく直観形式として諸対象が与えられ、それを思考することにより認識は成立する、そういうカントの説明は基本的に正しいとみるとスッキリするのです。カントは直観の形式として、実は空間とならんで、時間も考えました。ここでの議論ではそれを除いて論じました。

このあとカントの自由の問題、美の問題を述べたかったのですが、時間がありません。自由の問題は倫理学の基本問題です。善いことをすること、あるいは悪いことをすることの自由があつて、行為の善悪がはじめて論ぜられます。ですから行為の善悪が倫理の問題として論ぜられるためには、自由が存在することがまず第一に、理論的に説明されなければなりません。なにしろスピノーザ（1632～1677）という人はカント以前にすでに自由などない、というのです。原因・結果の因果法則で自然的世界は決定されている、と主張するのです。そして「投げられた石は自分では自由だと思っている」というのですから。結論をいえば、カントは自然界を支配する原因・結果の必然的法則の世界を越えて、知性界を想定することによって解決するのです。そこではもはやカントのいう構成的原理ではなく、統制的原理が働く世界です。美の本質に関して、カントは合目的性というア・プリオリな原理によって説明しようとしています。美の解明をしているとの意味で、基本的に私は成功していると思います。しかし歴史的に見ますと、たとえば絵画史において、その発展過程の説明原理としては、不十分に思われます。これはむしろ、私たちに与えられた哲学上の問題なのかもしれません。

来年2004年はカント没後200年になります。当然その間に、カントの意識しなかった種々の問題が生じました。非ユークリッド幾何学もその1つです。現在になりますと、以前にはなかった医療倫理の面で、新しい問題が生じています。例えば脳死、安楽死にも関連するセデーション（鎮静）など。環境問題もクローン人間も新しい問題です。これらはいずれも学者ばかりでなく、一般の人々も一緒になって考えなくてはならない、切実な問題となっています。環境問題において、いま大気汚染が取沙汰されています。自動車の排気ガスが一番の問題なのですが、このことにつきましては私はやや楽観的にみえています。科学技術の進歩によって、この問題は解決されるのではないかと、ひそかに期待しているのです。燃料電池がそれです。水を電気分解すると水素と酸素に分かれる実験をされたことがあると思います。燃料電池はその逆をおこなうのです。水素と酸素を化合して、逆に電気を取り出すのです。水素を発生させるさいにできる炭水化合物を別にすれば、基本的には水だけが排水されます。これを自動車の動力として利用すれば、無公害車が出現します。そればかりか大、小の発電プラントも考えられ、家庭用、ビル用、工場用に利用されるでしょう。そうすれば送電施設や電線も必要なくなります。

私個人としましては燃料電池がガンの根本治療の発見よりも早いのではないかとさえ思っているのです。ここ20年以内の出来事のように思うのです。現在すでに売り出されているハイブリット・カーは、その中間の産物ということもできます。もっともその間に大気汚染による患者が、続々とあらわれると困るのですが。

再びカントの話に戻ります。カントの思想に影響を与えた思想家、科学者は誰れか、という視点からお話しします。今まで名前を出した哲学者は多かれ少なかれカントの思想に影響を与えたと思います。カント自身の告白によれば、ルソー（1712～1778）もその一人です。哲学上の問題を考えるうえで、ティプニッツ（1646～1716）もあげられます。しかし私はニュートン（1643～1727）がもっとも大きな影響を与えたのではないかと思っているのです。ニュートン力学の示す世界観、これがカントに与えた影響は深刻だったと思います。カントは主著「純粹理性批判」で、自分の哲学上の業績の革新的な側面を強調して、あの地動説をとらえたコペルニクスになぞらえています。確かに地動説も、対象ではなく人間の主観性にア・プリオリな原理を認めるカントの思想も、自分の側に大きな変化を認めるという点で、共通点をもっていますから比喩としてはいいと思います。しかしア・プリオリといったものの本質を考えていきますと、ニュートンの影響が大きいと思うのです。この私の考え方は、あくまでも私の個人的な考えでありまして、学会で一般に認められている見解であるといったものではありません。私ができるように思う理由をも少し説明したいと思います。

ご存知のように、ニュートン力学がとりわけ宇宙論に果たした役割はひどく大きいのです。物と物とが互にひきあうということ、しかもそれは質料の大きさに比例し、距離の2乗に反比例するという数値まで与えました。つまり目にはみえないのですが、宇宙のいたるところで、このような仕方で、力というものが働いていることを示したのです。力という統一的な働きがあることを示しました。ニュートン力学の第一法則も、統一的な説明に役立っています。御存知のように慣性の法則です。地上に転がしたボールはだんだん速度をゆるめて、やがて静止します。これは通常私たちの経験するところです。ニュートンはそうはいいません。手を放れたボールは等速度直線運動をするのです。そのボールはどこまでも同じ速さで転がり続けるのです。もしそれが速度をゆるめたり、止ったり、曲ったりするのは、そのボールになんらかの仕方で、他の力が働いた結果だとみるわけです。経験的には転がしたボールがやがて止まります。それは摩擦力が働いた結果だとみるのです。慣性の法則を設定することにより、逆に摩擦力の存在が浮き彫りにされるのです。円運動も同様です。ひものついたボールをぐるぐるまわしますと、円運動をします。これはボールがその円から離れようとする力と、ひもによって内に引かれる力との合成によって説明されます。地球のまわりをまわる月、太陽のまわりをまわる惑星は基本的にはこの円運動によって説明されます。とにかくニュートンが「力」によって統一的に宇宙における運動を説明したことは、カントに大きな影響を与えたと見るわけです。カントが私たちの知識のうちにア・プリオリなものがあるとしたこと、そしてその他のア・プリオ

りを示すことによって、できるだけ統一的に説明しようとしたこと、その背後にはニュートンの影響があるのではないかと私は見るのです。

長々とカントを語りすぎたようです。私はカントを論じる以上、カントの思想をできるかぎり正確に理解したうえですべきだと考えています。したがって長い間、カント哲学がどのような思想なのか、との興味だけでカント哲学を研究してきました。と同時にカント哲学に限界があることは当然だと思ってきました。カント哲学のどこまでが現代においてなお有効で、どこからが現代哲学固有の問題なのか、との視点に立って見てきたつもりです。カント哲学に関してだけいいますと、構成的原理と統制的原理の2つによって、カント哲学の本質は説明できそうです。すでにこの考えは20年前から考えていたことなのですが、それでは構成的原理とはなにか、統制的原理とは何か、と追求することで時間をとられました。しかもその2つの原理がややカントにおいて多義的に使用されているため、統一的な説明をすることを困難にさせてきました。しかしようやくなんとか統一的に説明する見込みができました。あとどのくらいかかるかわかりません。これからこの仕事にとりかかるつもりです。生来の怠けもので、仕事が遅れに遅れました。これは私の性質ですから、どうしようもありません。

去る6月6日、助手の方を含めた文学科の先生方全員が、私の名誉教授授与のお祝いをして下さいました。深く感謝申し上げます。まだ若いつもりで、老人あつかいされるのはあまりうれしくないのですが、人に会うとよく「お元気ですか」と聞かれます。そのときは「なんとカントかやっています」と答えることにしています。有難うございました。

(注) (1) 実際にはロバチェフスキーの仕事はそんな簡単なものではないようです。「非ユークリッド幾何学の世界」(寺阪英孝著、講談社)によりますと、平行角をめぐる、ガウス(1777~1855)とその友人W.ボヤイ(父、1775~1856)とJ.ボヤイ(子、1802~1860)との間に長い間の論争があったこと、そしてそれに関してロバチェフスキーが、彼等と独立に解決を与えたことが記されています。寺阪氏によりますと、ガウスが「非ユークリッド幾何学」という語を手紙に書いたのは1822年のこと、妙な幾何学があるらしい(非ユークリッド幾何学のこと)とヨーロッパに広がったのは1855年のガウスの死後だとのこと。